

100歳の宮内さん、91歳の黒崎さんが快挙

9月は長月。露を結ぶようになっていわれている7日の白露は過ぎたが、まだまだ暑い日が続いているのか、どうか。22日は秋分の日(彼岸の中日)を迎える。先祖に手を合わせて。暑い月の8月、100歳になる宮内義光さん(鹿児島)がM100・800mで、6月には91歳の黒崎弘明さん(新潟)が重量投でそれぞれ世界的な記録を誕生させた。うれしいニュースの便りをお届けしたい。

写真・中野英聡

100歳の宮内義光さん(鹿児島) M100・800mで世界記録樹立

鹿児島県の宮内義光さんがM100クラスの800mで8分24秒36の世界記録をマークした。宮崎県総合運動公園競技場で8月18日にあった九州マスターズ選手権大会で、金字塔を打ち立てた。

これまで世界マスターズの800mにM100クラスはなく、宮内さんの記録が創設世界記録となる。日本記録は2004年に102歳の太宮良平さん(北海道)が出していた9分47秒7(手動計時)で、20年ぶりの更新だ。

レース当日は今夏の暑さが競技場まで。あまりの暑さに宮内さんは「800mと1500mにエントリーしていたけど、この暑さでは……。1500mは止めて800m一本に絞ろう」と、この決断がよかったのか、800mで快記録につながった。

創設世界記録と日本新記録を樹立した宮内さんは若い頃、青年団の大会で活躍。その頃は10000mが専門だった。その後、競技会から遠ざかっていたが、65歳からマスターズで陸上を再開した。

再び走り始めると、そこは“昔とった杵柄”。現在、M70・1500m、M75・5000m、M80・1500mと5000m、M85では800m、3000m、M90で3000m、5000m、M95になると400m、800m、1500m、3000mと、各クラスの日本記録保持者となっている。

今回、新たにM100クラスとなって快記録を刻んだ宮内さん。全日本マスターズ選手権では最優秀選手賞(織田賞)を4回受賞している。9月21日からの全日本マスターズ選手権はM100・800mと1500mに出場予定。同行する長女の声援を受けての力走が楽しみだ。

黒崎弘明さん(91歳・新潟)が M90重量投で11m05の世界新

こちらは力持ちで世界一に——。

新潟県柏崎市の黒崎弘明さん(91歳)が6月23日、茨城県石岡市で行われた第25回茨城マスターズ選手権の重量投で、M90クラスに遠征出場し、重さ5.45kgの重量球を11m05まで飛ばした。

このクラスの重量投の世界記録は11m02、日本記録は8m55。このいずれの記録も破ったのだ。特に日本記録は大幅に書き替えた。

当日の黒崎さんは「1投目に10m60ぐらいだった。2投目に11m05と伸

びた。最後の3投目は10m50ほど」と話す。体調の方は良かったようで「11m台とは、よく飛んだ」とご機嫌だった。

黒崎さんは陸上の経験がない。82歳でマスターズへ入会。砲丸投、円盤投、やり投で活躍してきた。近年の全日本マスターズ選手権ではコロナ禍前の2019年、第40回記念国際の群馬大会でM85クラスの砲丸投(3kg)で8m99を突き出して1位。円盤投(1kg)は19m26の2位だった。

コロナ禍後の2023年、山口で行われた第44回大会では一段とギアを上げて、M90クラスの砲丸投とやり投に出た。砲丸投(3kg)は8m34、やり投(400g)で22m92を投げ、いずれも日本新、大会新だった。旧記録は7m38と20m78である。黒崎さんはMVPに輝いた。

9月の全日本マスターズ京都大会には新潟から足を運び、M90の砲丸投とやり投で記録に挑む。特にやり投は「22～23m台はね」とやる気満々だ。

卒寿の声を聞き、ますます記録向上を、の黒崎さんは今回の重量投だけでなく、先述の砲丸投とやり投に加え、円盤投21m56、ハンマー投25m35の投てき種目にとどまらず、立五段跳8m14でもM90クラスの日本記録保持者となっている。

京都での期待大！

日本選手権・男子1500mは M40の堀貴博さん(40歳)が1位

6月に新潟・デンカビッグスワンスタジアムで行われた第108回日本選手権でマスターズ1500mが行われ、男



2008年全日本マスターズでの宮内さん(本人提供写真)

子(タイムレース)では堀貴博さん(40歳・神奈川)が4分01秒32で1位となった。

男子はM35からM65までのクラス年齢の選手が競った。1、2組に分かれてレースを行い、タイム順に順位を決めたが、2組のトップがM40クラスの堀さんだった。

タイムレースの結果、2組目の8位までが全体のトップ8を占めた。1位となった堀さんは陸上のブランクが長く、その期間は15年。再びマスターズ会員となり、陸上復活したのが38歳の2022年。その頃はM35クラスで1500mを3分56秒06で走り、全国ランク1位に。

今回の日本選手権に出場できたことについては「ありがたいですね。このような舞台に立ったことで興奮しました」と言って、レースに挑んだ。堀さんは前を走る選手を追って、ラストパートで抜くと、そのままゴールへ。4分01秒32のタイムについては「体調がもう一つで、タイムは満足していません」と話す。

堀さんは39歳の23年、1500m 3分55秒54を出し、40歳になった24年の今年、日本選手権で出したタイムを上回る3分56秒26を出した。この記録はM40クラスの日本記録である3分58秒53を上回り、日本新である。

今後の目標については「3分53秒台を！」と張り切っている。ただ、9月の全日本マスターズ選手権には残念ながら姿を見せない。

それはそれとして、堀さんを中心にしたメンバーで、日本マスターズでは非公認となる4×800mRに挑んだ。8月17日、場所は大阪・ヤンマースタジアム長居。M40クラスの世界記録は7分54秒17(アメリカチーム)で、この記録に挑戦したのだが、7分59秒台にとどまった。ちなみに堀さんのマスターズ登録は大阪なのだ。

2位に楠本憲司さん(43歳・徳島)
3位は中村高洋さん(40歳・鹿児島)

日本選手権のマスターズ男子1500m

6月30日に新潟で開催された日本選手権男子マスターズ1500mで優勝した堀さん



トップと0秒67差で2位に続いた楠本さん

では、堀貴博さんに続いて楠本憲司さん(43歳・徳島)が4分01秒99で2位、中村高洋さん(40歳・鹿児島)が4分02秒56で3位となった。

2位となった楠本さんは2023年に地元であった徳島中長距離記録会で1分55秒91のM40・800mの日本記録をつくった。ご本人は日本選手権に臨む前「1500mの方はまだまだなので、3分台で走れば」との思いだったが、及ばなかった。

レース後「やはりダメでしたね。練習時間が足りなくて」と残念そう。時間が取れない、のには理由がある。楠本さんは京都の薬科系大学を出て、現在は、東京本社の薬科系研究の会社に勤めている。新しい抗がん剤の研究などに携わり、今春からはさらなる部署へと移り、なかなか練習時間を取れないのだ。

それでも「(中距離を)走りたい」気持ちがあって、各大会に出ている。それは京都の名門・洛南高の陸上部で打ち込んでいたからだろう。高校時代の「800mは1分55秒台、1500mは3分54秒台でした」と。マスターズへは40歳から。

業務の都合で全日本マスターズ選手権への参加はしていないが、40歳の21年にはM40・800m 1分58秒31でランキングは全国一。1500mでは4分21秒68で5位。翌22年はM40・800mで1分56秒85とタイムを上げ

全国ランク1位に。1500mも4分05秒27と記録向上、全国ランクを2位とした。

800mのベストは日体大記録会で今年、1分54秒93をマークしており「今後の目標は1分53秒台。1500mは3分58秒台をと思っていますが……」が胸の内。

学生時代は陸上同好会だった楠本さん。今なお陸上への愛着を忘れられず、マスターズ陸上で走り続けている。「仕事もありますが、時間が取ればマスターズの世界大会に出て、800mでメダル争いをやりたいですね」と笑いながら話した。

◇

なお、13人で競った1組は利根川裕雄さん(53歳・長野)が4分18秒11でトップ。タイムレースの全体としては10位だった。とはいえ、1組の2位とは8秒05のタイム差があり、M50クラスとしては圧倒的な強さだ。

それもそのはず。23年度日本記録集によると、M50・800m 2分03秒05、1500m 4分06秒37と記載されている。いずれも52歳でマークした日本記録だ。それより以前、M35クラスから各中長距離の日本記録をつくってきた。

23年の全日本山口大会ではM50・1500m 4分12秒17(大会新)、5000m 15分36秒67(同)を制した。つわものである。